

---

# 時を越えて

槻乃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
時を越えて

【Nコード】  
N7775X

【作者名】  
槻乃

【あらすじ】  
佑之進の目の前に未来から来た男が倒れていた。  
未来から来た蓮夜はなぜこの時代に来たのか、そして未来に戻ることができのだろうか。

舞台は江戸時代ですが、時代物の要素はあまりないかもしれません。

## 未来から来た男

月明かりの綺麗な夜だった。

山のふもとにある家に帰ると目の前に不思議な格好の男が倒れていた。

「何者だ・・・？」

見た目の年齢は近い。死んでるのかと思いきる恐る恐る近寄ると息をしていることを確認できた。

「おい」

揺さぶるとうーんと唸る声が出た。

「寝てるだけか・・・」

しかし、このままにはしておけない。

「仕方ない」

よいしょと男を担ぎ家の中に入れた。

翌朝

「起きたか？」

「ん・・・おはよう・・・ございます・・・？」

男は眠そうに体を起こし、そしてきょろきょろと家の中を見渡した。

「・・・どこ？」

「私の家だ」

「誰・・・？」

男は私の姿を見つけると不思議な言葉を発した。

「コスプレ？」

「こおすぷ・・・れ？」

こすぷれとは何だ？

「お主はどこのものだ？なぜ家の前で倒れていた」

「・・・時代劇みたいになしゃべり方だな」

と何かぼそぼそとつぶやいて男は答えた。

「ま、いつか。俺は藤堂蓮夜」

男は名前を名乗ってきた。

「あなたの名前は？」

続いて名前を聞かれたので答えるしかない。

「私は佑之進という」

「佑之進か。本当に時代劇とかに出てきそうな名前だなあ」  
男がまた何かを言うが意味はわからなかった。

「それで・・・お主はなぜ我が家の前で倒れていたのだ？」

「んー・・・昨日学校から帰ろうとして・・・あれ？」

一生懸命思いだそうとして唸っていたが結局、

「むう・・・意味がわからんぞ」

と腕を組んで首をかしげていた。

「そっだ」

急に顔をあげ私を見た。

「何だ？」

「倒れてたってことは、君が俺をここまで運んでくれたんだよな？」

「ありがとう」

悩んだりお礼を言ったり、気分がごろごろ変わる奴のようだ。

「いや、武士として当然のことをしたまでだ」

そう答えると蓮夜が次はいつそう首をかしげた。

「武士ねえ・・・なあ、ここどこ？」

「だから、私の家だ」

「じゃなくて、どのあたりかってこと！地名とか」

「江戸だぞ」

「・・・いやいや」

「どっした？」

急にあわて始めた。

「今日って何年何月何日!？」

「?」

日付を聞かれたので正直に答えた。

「・・・江戸・・・」

「だからそう言っておるっ」

「江戸・・・時代・・・」

様子がおかしい。

「もしかして、將軍つて徳川？」

「何を当たり前のことをいっておるのだ？最近かわったばかりだろっ？」

「・・・!!!」

衝撃を受けたのか、布団の中にうずくまる。

「蓮夜？」

「いやいや、ありえないっ。はあ？うそだ、うん、これはドッキリだ!!」

「おーい・・・」

布団にもぐった蓮夜は大きな独り言を言ったかと思うとがばっと布団から飛び出した。

「嘘をついても無駄だあ！俺は騙されねーぞ!!」

「嘘など言っておらん」

「嘘だあ！」

何が嘘なのかわからない。

「とりあえず、飯でも食べ。そして落ち着け」  
どうにか落ち着かせることに成功し、ともに朝食をとることとなった。

「かたい・・・」

米を食べた感想がこれだ。

「大事な米だ。残すなよ」

「はい」

そしてみそ汁も平らげた。

「残さず食べたな」

お腹一杯になったららしい蓮夜はじっとしていた。

「ああ・・・」

そこで蓮夜から話を聞いてみるとトーキョーとかいう国から来たという。

「トーキョー・・・聞かない名だな。薩摩のほうの地名か？」

「・・・えつと・・・まじかよ・・・」

ため息をつきながら言うには、未来の江戸のことだという。

「未来から来たというのか？」

「そうみたい」

先ほどまでとは変わって小さく苦笑していた。

「しかし・・・未来ではそのような服装を？」

彼の格好はまるで異邦人の服装に見えた。

「まあ、こんな格好かな。ただのブレザーなんだけど・・・」

最後の言葉の意味はわからないがこの異様な格好は彼にとって普通のらしい。

未来から来たというのには信じられない話だ。しかし、なぜか蓮夜の言葉なら信じてもいいという感じがしたのだった。

## 町の中にて

とりあえず最初に町の中を案内することになった。

ついでに、未来の服は目立つので着物は着替えさせた。

もともと、次の仕事を探しにも行かなくてはならなかったらしいだろう。

「まるでテレビの時代劇の中じゃん・・・」

意味がわからない。さっきから不思議な言葉を連発していた。

そして、蓮夜は

「夢じゃないんだ・・・」

頬を引つ張りながら言っていた。よほど信じられないらしい。

「なあ、それって本物？」

町を歩く中、腰のあたりを指さしながら言った。

「刀か？本物だぞ」

「危ないなあ」

「丸腰の方が危ないだろ？」

「・・・そうだよなー、そういう時代だよなー」

「なんだ、未来は皆、鉄砲か？ぴすとるか？」

「ねえよ。ったく」

呆れたように言われた。

「だったら、どうやって身を守る!？」

「未来はなー、殺し合いなんてないんだよ。まあ・・・殺人事件とか

はあるけど・・・」

「斬り合いはない・・・ということでもいいのか？」

「ああ」

未来は平和な世の中になっているのだろうと思いをはせていると、遠くから数人の男たちがこっちをみて声をあげた

「いたぞ!!!!!!」

「見つけた!!!」

「何あれ。こっちに向かってくる気がするんだけど」

「私を狙っているのだ。逃げるぞ！」

「ん!？」

思わず手をひっぱり、反対側に逃げた。

「おい、佑之進!？」

「いいから走れ！」

意外と蓮夜の足は速く、うまく逃げ切ることができた。

「はあ、はあ、はあ・・・ここまで来たら大丈夫だ」

「ああ・・・何だあいつら・・・」

「私を探しておるのだ。すまん、まきこんで」

「それはいいけど・・・何？追われてんの？」

目を丸くして聞いてきた。

「面倒事に巻き込まれてな。大丈夫だ。しばらくは来ないだろう」

「そうなのか？」

「ああ、あやつらも巡回の流れを止めるわけにはいかぬ、半刻もすればこの町からいなくなる」

「そっか」

そして、休憩と昼食のために飯屋に入ることにした。

「しかし、お前は足速いな」

「これでも学校で1番速いんだぜ」

「学校・・・？」

聞いたことがある。

「この時代なら・・・寺子屋？」

「字の読み書きができるのか？」

「それはもちろん」

「いいとこの跡取りとかなのか？」

もちろんそこだけが読み書きできるわけではないけれど。

「いや、一般家庭」

そして未来の教育について話を聞かされた。

「佑之進もしかして字読めないのか？」

「いや・・・読み書きできるが・・・そうか・・・10年も勉強を・・・」  
「義務教育だしな」。それに俺は大学行くつもりだからあと5年は  
学校に通うよ」

「22歳・・・？」

「うん」

未来と今の差を思い知らされる。

「蓮夜は未来から来たと言ったな」

「そうだよ」

「過去、この時世のことを知っておるのか？」

「多少は知識はあるよ」

「・・・」

「授業で習うんだ。俺日本史取ってるし」

「にほんし・・・？」

「この国、日本の歴史」

「なるほど・・・」

「関ヶ原の戦いとか、本能寺の事件とか・・・。これはもう過去の話  
だろ？」

「・・・そうだな」

ということも未来のことも知っているのか。

「これから日本はどうなる？」

「まー・・・ん・・・言わない方がいいかも」

「何!？」

「だって、これで未来変わっちゃったらどうすんだよ」

「・・・そうだな」

未来を変えるわけにはいかないのか？

「でも、少なくとも俺の生まれた時代は戦もないし、戦争もないし、  
平和だ」

「そうなのか・・・。その・・・身分は？」

「ない。とはいきれないかもしれないけど、気にするもんじゃな  
い。家業を継がなくてはいけないということもないし、自分のした

いことをできる自由な時代だ」

「なんと！では・・・」

「何？」

「・・・その・・・」

「なんだよ」

「・・・何でもない」

「？」

聞きたいことがあった。蓮夜の言葉が本当ならば、それは自分の願いをかなえられると思えることだった。

「それよりさー、巻き込まれてるって何に？」

ある程度話を終えて、蓮夜が先ほどの男たちのことについて聞いた。

「通り魔」

「はあ？」

「通り魔の犯人にされそうなんだ」

「何で？」

「最近越してきたからだ。それまで他の土地にいたし、よそ者は怪しいってことなのだろ」

そのせいで、毎日のように追いかけている。

「佑之進君はちがうのにねー」

お茶のお代わりをつぐために、店主の女房イツがでてきた。

「そうなんですよ」

「・・・味方？」

「味方もなにも、この町のほとんどの人は佑之進君が通り魔なんて思っていないわ」

豪快にイツさんは笑った。

「で、このこはお友達かい、見かけない顔だねー」  
蓮夜の顔を見た。

「ええ、そんなところです」

「そうかいそうかい、ま、ひいきにしてくれよ」

そしてイツさんは真剣な顔に急になった。

「また、通り魔出たらしいよ」

「え？」

「昨日の夜だ。気を付けなよ」

「はい」

イツさんはそれだけ言うとお奥に入って行った。

「通り魔か、物騒だな」

「その犯人にされたらたまったもんじゃないぞ」

「それもそうだ」

休憩も終わると再び町に繰り出した。

「そんなに珍しいか？」

きよろきよろとする隣の男をみた。

「うん・・・すげーよ・・・」

牛車がいたときは、かなりのはしゃぎようだった。

「牛！馬！町！」

「・・・おーい・・・」

「やべえな、まじ時代劇」

楽しそうだから放っておこう。

「ちよつと寄っていいか？」

「あ、どーぞ」

寄ったのは仕事の紹介所。基本的に用心棒で生計を立てている。

「おう、佑之進、いい仕事あるよ」

「本当ですか？」

よかった、仕事はあったようだ。

「通り魔の捕獲。これで、やつらはなをあかしてやれ」

楽しそうに紹介人は言った。

「いいじゃん、やれば？」

「蓮夜！」

「おれも協力するからさ」

・・・なぜ、こいつはこんなに楽しそうなのだろう。

「それに、この町を案内してくれたお礼」

「そうか」

結局私はその仕事をする事になりました。

## 通り魔との対峙

夜になると、蓮夜と共に町の中を見回ることにした。

「なぜ、その格好なんだ？」

蓮夜は初めて会ったときに着用していた奇妙な服装に着替えていた。上着は脱ぎ、ねくたいとやらは外していたが。

「袴動きにくいんだよ」

「そういうことか」

確かに危険な仕事だ。慣れない服よりもこちらのほうがいいのだから。

一刻半もすぎたころ、町中に刀を差した男が現れた。

「あいつか・・・？」

「怪しいな・・・」

ふらふらと歩いている。

「つけてみるか」

「おう」

そつと後ろからつけることにした。

そして・・・薬屋の息子が偶然やつの前を通りかかったのだ。

「・・・うごいた・・・」

薬屋の息子はどうやら他の町に行っていて、やっと今帰って来たというような風貌だった。

それをみた男は息子を追った。

「・・・いくぞ」

蓮夜に声をかけると小さくうなずいた。

「な、なんだ！？」

息子が叫んでいる。

「た・・・誰か！！助けてくれ！！」

追いついた時には息子は襲われていた。

男は刀を抜き、今にも斬りかかろうとしていた。

「!!!」

キーン

「はあ、はあ、はあ……」

「!!!」

刀を抜いて男と息子の間に入り、直前で刀を止めることができた。

「ふう……大丈夫か？」

蓮夜が来て、薬屋の息子に話しかけていた。

「ああ……ありが……とう……ございま……す」

腰がぬけたようだ。

「佑之進、俺はこいつを運ぶ、その間頼んだぞ」

「わかった」

そして自分は通り魔と向かいあつた。

「貴様が連日の通り魔……と考えていいな」

「はんっ」

そのまま再び斬りかかって来た。

「っ……」

力が……強い。

「よええなあ……俺はなあ、強いやつとやり合いたいんだよ!!!」

「くそっ」

でも……力がなくても……負けるわけにはいかないんだ!!!

「はっ!!!」

体重をかけて斬りこんだ。

「ちっ」

一歩後ろに跳んで再び向かい合う。

「貴様あ……小さいくせに……」

「小さいからって馬鹿にするなよ!!!」

身長がなくもまげられない。

「小さいは小さいなりに戦い方があるんだよ!!!」

その後何度も刀を交えた。

「はあ、はあ、はあ・・・」

「やるな・・・ガキ・・・」

お互い息が切れていた。

「これで最後だ」

そういつて通り魔は思いつきり斬りかかって来た。

カーン

「あ・・・！」

「これでおしまいだなあ・・・」

刀が飛ばされた。

「！！！」

くそっ・・・ここまでか・・・。

こんなところで死ぬなんて嫌だ・・・！

「佑之進！！！」

とどめを刺されそうになった時ちょうど蓮夜が戻ってきた。

「くるな！！！」

未来から来たこの男が・・・斬り合いを知らないこの男が通り魔にか  
なうわけがない。

「そんなこといつてられねーだろ！」

「蓮夜・・・」

そして蓮夜は通り魔の前に立ちはだかった。

「よお、かかって来いよ」

「なんだ貴様。奇妙な格好をしておって・・・丸腰じゃないか」

「丸腰・・・？ちげえよ！！！」

蓮夜は言うなり跳んだかと思うとそのまま通り魔の横腹に思いつき  
り蹴りをいれた。

「必殺、回し蹴りってな」

いえいと言つて体制を立て直す。

「ぐ・・・やるな・・・ガキ」

「はいはい」

そして次の瞬間人は通り魔の腕を手刀でたたき、刀を落としていた。

「いつ・・・」

「じゃあ、とどめなー」

はっと気合をいれたかと思うと顎に向けて蹴りを入れていた。

「ぐああああ!!・・・」

「・・・あ・・・やべ」

かなり飛ばされ、地面に横たわった姿を確認してつぶやいていた。

「・・・ふうう・・・佑之進、無事か？」

「・・・ああ・・・おまえ・・・つよい・・・」

ありえない。刀を持つ相手に・・・丸腰で・・・素手で勝つなんて。

「一応鍛えているからさ」

にっとわらって手を差し出してきた。

「立てるか？」

「ありがとう」

「どういたしまして」

お礼を言うとうれしそうに彼は笑った。

「それにしても・・・ちょっとやりすぎたかなー・・・気絶しちゃった

よこいつ

つんつんと指先でつついていた。

「それでも・・・捕獲できれば十分だ」

持ってきていた縄で縛りあげると、役所に通報した。

「薬屋の息子は？」

「大丈夫、家まで届けたよ」

「そうか」

無事ならいい。よかった。

「それで・・・蓮夜・・・さっきの・・・」

「ん？ああ、気にするなっつて」

「怖くないのか？初めて刀見たのだから？」

正直、初めて奴を見たときに怖いと思ってしまった。

「だって・・・佑之進倒れてたし、助けないとناًって思ってたから  
それどころじゃないさ」

「・・・」

「それに、鍛えてるっていったら？俺は丸腰でも、この手、足が  
武器だ」

「戦うのか？」

「戦うってほどじゃない。ただの喧嘩だよ。といつても負けたこと  
はないけどな」

ニヤリと蓮夜は笑う。

「佑之進もさ、小さいし、華奢だけどあそこまでやれるんなら強い  
んじゃないのか？」

「・・・私は・・・強くない・・・」

悔しい。守られまいとして、守ろうという勢いで臨んだのに助けら  
れるなんて。

「無力だ・・・」

「そんなことないと思うぜ」

驚いて蓮夜を見上げた。

「だって、あの薬屋の息子言ってたもん」

「・・・」

「助けてくれてありがとうってさ。伝えてくれって」

「・・・そうか」

「ん？何？泣いてんのか？」

「うるさい！見るな！！」

「・・・ふっ・・・ばーか」

あたまをくしゃくしゃとやられる。

「男児たるもの泣くわけにはいかぬ」

「・・・そうだな」

よしよし、とそれでも涙が止まるまで蓮夜は離れることはなかった。

## 未来の記憶

翌朝、紹介所に報酬をもらいにでかけた。もちろん蓮夜もだ。

「おおお!!」

お金を見て驚いていた。

「やつべー・・・すげー」

マジマジと銭を見つめている。

「ほんものだー」

「蓮夜、あたりまえだろう」

「だってさ、教科書でしか見たことないし」

本物を見るのは初めてだという。

「銭の形が変わるのか?」

「うん、小銭はこんな風に丸いけど、紙幣って言って紙のお金もあるんだぜ」

「そうなのか」

やはり未来はわからない。

「これ俺も貰っていいの?」

お金を触りながら聞いてきた。

「もちろんだ。お主がいなかったら通り魔は捕まってない」

「そっか。でも・・・あげるよ」

「は?」

金の入った包みを渡そうとしてきた。

「俺がもっててもしょうがないし」

「・・・受け取れぬ」

「だってさー、俺の育った時代じゃ、これ使えないもん」

だから、どうぞと行って渡そうとされた。

しかし、そこで疑問が1つ浮かんできた。

「・・・どうやって未来に帰るのだ?」

「・・・あ・・・」

「それまで、お主が自分で使うがいい」  
ところはその言葉はもうきこえていないようだ。  
「どうやってもどるんだろ・・・」  
考えてなかったのか？こいつ。

元の時代に戻る方法を2人で考えることにした。

「先生の所に行ってみるか？」

町一番の物知りで先生と呼ばれる人の元に行くことにした。

「おお、佑之進の坊やじゃないか」

家を訪れると早速中に入れてくれた。

「坊やじゃない。それで相談なんだが・・・」

「ん？ああ、後ろのが噂のつれか」

「噂・・・？」

先生はじろじろと蓮夜を見た。

「通り魔を素手で倒した凄腕」

「・・・俺のこと？」

蓮夜は自分を指さして驚いていた。

「それで、相談とは？」

「蓮夜のことだ」

そして未来からきた人間だということを説明した。

「・・・本当か？」

「本当です」

「・・・未来か。それで戻る方法を知りたいと」

「はい」

すると一言で答えを言った。

「知らん」

「・・・」

「・・・ですよねー」

蓮夜はわかってたのかそう茶化した。

「この時代に来る前に何が起きた？」

先生はとりあえず話だけでも聞こうと言った。

「えーと・・・車にひかれそうになって・・・誰かを・・・」

「どうした？」

「誰かを・・・守ろうとして飛び出した・・・」

蓮夜が混乱したように言う。

「誰か？」

「はい。誰か・・・誰だ？あいつは・・・」

思いだせないようだ。

「あれ・・・思い出せない」

「衝撃で忘れているのか？」

「そんなわけない！」

「!？」

いきなり叫んだ。

「あいつのことを忘れるなんて！・・・でも・・・誰か・・・わからない」  
悔しそうに言う。

「誰だ・・・大事な・・・人・・・」

「大事な人・・・？」

「大事な・・・いつも一緒にいた・・・のに、思い出せない・・・誰だ？あいつの顔も名前も思い出せない・・・」

寂しそうに見えた。

「大事な人だった・・・それしか・・・わからない」

「・・・そうかい」

先生がつぶやいた。

「蓮夜、他の人の記憶は？親とか友人とか」

「・・・それは覚えてる。そいつの記憶だけ・・・」

余計さみしそうになった。

「推測だが、その大事な人の記憶を思い出せば戻れるんじゃないのか？」

先生の言葉に小さく蓮夜は答えた。

「・・・そうかな」

「わからんがな。しかし、この時代に来る前の記憶がない限り解決方法はない」

「・・・わかった」

ゆっくり蓮夜はうなずいた。

「そうだよな、うん、大丈夫」

パシッと顔を叩く。

「きつと思い出せる」

「蓮夜・・・」

「何？心配してくれてんの？」

「！！！」

さつきとは雰囲気を変えて笑っていた。

「それは当たり前だろ・・・！」

「ふくん・・・」

立ち上がると、手を頭に載せてきてくしゃくしゃとされた。

「ありがとな」

「！！！」

「なんだよ、逃げんなよ」

「つ・・・」

なんだか・・・悔しい。心配なんて。

「佑之進」

「何だ・・・？」

「ということ、俺の記憶が戻るまで居候させてくれ」

何がということなんだか。しかし、仕方ないだろう。

「わかったよ」

そして一緒に生活するようになった。

3日もすると一緒に生活するのにもなれた。

「ずいぶん馴染んできたようだな」

「まあな」

今は剣の稽古の真つただ中。

蓮夜が教えてほしいといってきたのだ。

「しかし・・・筋はいいな。剣道しておったのか？」

「んー・・・たぶん、思い出せないあの人のことに関係してると思うんだ」

「？」

「あの人が剣道をしているのを見ていた気がする」

曖昧なのはあの人のことだからなのだろう。

「だから・・・こういうことだろ」

メン！と竹刀を頭上にもってきた。

「・・・そういうことだ」

教えて3日。蓮夜の腕はかなりの上達していた。

「さて、飯にするか」

「おう」

蓮夜が作るといって料理を作ってくれた。なかなか美味だった。

「お主の時代では男も料理をするのか？」

手なれたようにみえたから。

「もちろん。まあ、俺の家は両親が共働きだから俺が作ることも多かったんだけど。母さんもちゃんとつくるぞ」

「両親か・・・」

「ん？」

「・・・いや・・・いい」

「なんだよ」

聞いてもどうしようもないことなのはわかっている。

「気にしないでくれ」

「ふーん・・・。あ、そういえばさ、前から思ってたんだけど」

「な、何だ？」

「お前・・・」

「・・・」

「金持ち？」

いぶかしげに見てきた。

「な・・ぜ？」

「なんかさー、他の町の人と話し方違うし、ちょっと気品あるような気がするし」

「それは他の町から来たからで・・」

「そうなのかなー・・」

うーん、と唸るもそれ以上は聞いてこなかった。

そう・・なぜここにいいのか知られるわけにはいかないから。

昼を過ぎると紹介所に行くために町に出ている。

次の仕事も見つかり、帰りは茶屋によることにした。

「こらあー!!」

目の前を年ごろの娘が怒りながら中年男性を追いかけていた。

「待ちなああ!!」

「ひいいい」

男は悲鳴を上げるも楽しそうに逃げ回っていた。

「ったくもう！ほら、お代払って行きなさい！」

どうやら悔い逃げのようだ。彼女は捕まえお代を貰うと手を話した。

「もうするんじゃないよ！」

男はどうしようかなーと笑いながら歩いて行った。

「どうしようかなーじゃないわよ！ぶん」

と彼女は飯屋の中に戻ろうとすると中から母親が出てきた。

「ぶんじゃない!!まったくもう、女の子でしょ!!」

バシツと頭を叩く。

「母ちゃん！仕方ないでしょ！食い逃げよ!!」

「だからってそんなはたしなない格好で走るな！まったく、そんなんだから嫁の貰い手がみつからないのよ」

「うるさい!!嫁になんかつ!!」

とか言いながら娘は母親に連れられ店に入って行った。

「・・・佑之進」

「・・・ん・・・？あ、何？」

「お前・・・あんなのがタイプなのか？」

「たいぷ・・・？」

「あー・・・あーいう女の子が好きなのか？」

「！！ちがうぞ」

「ふーん」

「なんだよ」

「それにしてもじーっとみてたよな」

「つい、釘づけになってしまっていた。」

「それは・・・」

「あんな女・・・。しかし、そこで言葉を飲み込んだ。」

「それより、蓮夜はあんな子のことどう思う？」

「ん？俺？俺はー、もうちっとおとなしい方がいいなー」

「いひひと笑う。」

「おしとやかで、優しい子」

「そうか」

「佑之進は？」

「・・・興味はない」

「そうか」

どこか意味ありげに彼は笑った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7775x/>

---

時を越えて

2011年12月14日18時53分発行